教育最前線 連載22

●沖縄県立沖縄水産高等学校・二輪車安全運転教室

二輪車で通学する高校生に実技を通じて安全運転を指導

昨年10月18日、沖縄県立沖縄水産高等学校（沖縄県糸満市）が津嘉山自動車学校（沖縄県南風原町）と名護自動車学校（沖縄県名護市）、沖縄県警察本部などとの共催（協力：本田技研工業（株）安全運転普及本部熊本普及ブロック）で、二輪車安全運転教室を開催した。

同教室は二輪通学者および二輪免許所持者が「事故にあわない」「事故を起こさない」よう安全運転意識を向上してもらうことを目的としている。

同校で交通安全を担当する高良義樹教諭は「当校は二輪車による通学を許可しているため、対象となる生徒には毎年、安全運転指導を行っています。より実践的な指導で、生徒にも興味を持って取り組んでもらおうと、今回このような形で実施することになりました」と話す。

津嘉山自動車学校と名護自動車学校の教習指導員が沖縄水産高校の生徒たちに原付の実技指導を行った

ポイント① 実車を使った参加体験型のトレーニング

原付での通学が許可されている生徒には実車を使っての実技指導が行われた。実技によって自分の弱点を見つけ、どうしたら安全運転につながるか気づいてもらうことが目的である。

今回は10数名の生徒が参加し、指導は、津嘉山自動車学校と名護自動車学校の教習指導員が担当した。

「若年層の方は、自分の経験不足から無理な運転や判断ミスをしてしまいがちです」と津嘉山自動車学校の教習指導員である外間圭三さんはいう。

ポイント② 「走る・曲がる・止まる」の基本を身につけてもらう

実技はブレーキング、パイロンスラローム、千鳥走行。いずれも最初に、白バイ隊員が模範走行を見せた。ブレーキングは直線を30km／hで走行し、目標物に合わせて停止するトレーニング。パイロンスラロームでは、スムーズな体重移動とアクセル操作による運転技術の習得に生徒たちが取り組んだ。千鳥走行はジグザグに配置されたパイロンの間を通り抜けるという課題。低速でのバランスのとり方を身につけた。

千鳥走行に取り組む生徒

ポイント③ 二輪車事故の特徴を理解してもらう

免許は持っているが通学に二輪車を利用していない生徒に対しては、体育館で座学とライディングトレーナー※体験（左記参照）を実施した。まず、ホンダのインストラクターが二輪車の事故の特徴を解説。交差点で前方に右折待ちの四輪車がいる場合は、そのクルマのカゲに対向右折車がいることを予測して、十分に減速して確認するなど、右直事故を防ぐためのアドバイスを行った。

この他、事故発生時の対応や、加害者になった場合の賠償責任などについても生徒に説明した。

地域に根ざした安全運転教育のために

高良教諭は今回の二輪車安全運転教室の感想を次のように述べた。

「一人ひとりの運転を見ながら、丁寧に指導していただけたので、生徒には良い経験になったと思います。また、教習所やホンダの皆さんの指導方法は、私たち教師にも参考になる部分がありました。生徒たちを事故から守るために、こうした教育を今後も継続させていきたい」。

実技指導を担当した外間さんは、「教習所が地域の交通教育センターとしての役割を果たすためにも、高校生への安全運転教育は重要です。生徒の皆さんに私たち教習指導員を身近な存在に感じてほしいと思います。この教室を開催するにあたり、ホンダの指導ノウハウも、たいへん参考になりました」と語る。

こうした自動車教習所が主体的に取り組む交通安全活動を、ホンダは教育プログラムや指導ノウハウの提供などを通じてサポートしていく考えだ。

※ライディングトレーナー＝ライダーの危険予測能力を高めることを目的に、Hondaが開発した二輪車安全運転教育機器。運転操作に応じた走行映像がモニターに映し出され、二輪車の疑似走行体験を可能としている

「二輪車安全運転教室」の内容

1 乗車前の準備

安全で快適な運転のためには日常点検や正しい乗車姿勢が重要であることを生徒たちに理解してもらう。日常点検では最低限、「ブタと燃料（ブレーキの効き具合、タイヤの空気圧や溝の深さ、灯火類の作動、燃料の量）」はチェックするように伝えた。

乗車姿勢では、特に足のつま先を内側に入れて膝が開かないようにアドバイス。

ヘルメットは転倒時に脱落しないように、あごひもをきちんと締めることを強調した。

2 走行トレーニング

実技を通じて、生徒に「走る・曲がる・止まる」の基本を身につけてもらう。白バイの先導で慣熟走行を行った後、ブレーキングやパイロンスラローム、千鳥走行などが行われた。

3 四輪車の死角

ドライバーの立場から二輪車がどのように見えているのかを確認してもらうために、生徒一人ひとりが四輪車の運転席に座り、バックミラーには映らない死角が存在することなどを確認。そして、教習指導員が四輪車のバックミラーに自分の原付が映り、自分の存在がドライバーにわかる位置を考えて走行するようアドバイスした。

4 ライディングトレーナー体験

事故防止にはさまざまな交通場面で危険を予測することが有効であることを伝えるために、ライディングトレーナーによる危険予測トレーニングが行われた。生徒の代表者数名に体験してもらい、その運転状況を大型スクリーンに映し出す。体験が終わるとその過程を再生して、事故に遭った場面ではどのような危険予測が必要だったかを、生徒たちに考えてもらった。

読者の声

ご愛読者のみなさまへ

SJに対するご意見・ご感想をお寄せください！SJ編集部では今後の紙面づくりの参考にさせていただくため、みなさまのご意見・ご感想・ご要望を下記メールアドレスにてお待ちしております。

sj-mail@spirit.honda.co.jp

●田尻さくら高等学校（宮城県）教諭
小野寺 隆一さん

私は、高校の教員として生徒たちの交通安全指導に取り組む他、二輪車安全運転推進委員会特別指導員として、県の二輪車安全運転大会並びに全国大会出場者の訓練等に従事しています。

学校の交通安全教育は、ある意味閉ざされた世界で、外部の情報を取り入れることが少なくなりがちです。一方で、学校現場の現状を外部の方に理解していただく機会も少ないと感じています。私は二輪車安全運転の活動やSJ紙等の情報を取り入れることで、学校と外部のパイプ役となって、青少年の交通安全教育に役立てていきたいと考えています。

学校現場では、限られた時間の中で、目の前の生徒の実態に合わせ交通安全教育を行います。私は平成20年度に（財）全日本交通安全協会の自転車安全教育指導員の認定を受け、昨年度に、参加体験型の交通安全教室を実施し、自身のスタントを交えながら自転車事故の危険性を伝えました。こうした指導を通じ、何が危険なのかを生徒自身に考えさせ、自ら判断して事故防止につなげる力を身につけさせたいと考えています。また、何よりも命の大切さを伝える教育が重要と感じています。

これからも、さまざまな視点で指導に役立つ有益な情報を提供して下さることを期待しています。